

文献紹介

Robert N. Bellah, *The Broken Covenant*,
N. Y., Seabury Press, 1975

葛 西 実

1975年に出版されたロバート・N・ベラーの『破られた契約』（*The Broken Covenant*）は、一人の社会学者、市民、父親、人間として今日のアメリカの危機に対するベラーの応答である。この間の事情を知る為には、ベラーの『信条を越えて』（*Beyond Belief*）の序に画かれているベラー自身の知的遍歴が貴重な資料になるが、一つのより直接的な伏線として浮かびあがってくるのは、「アメリカの現実についての省察」（“Reflection on Reality in America”）である。このマコール記念講演は、お嬢さんの自殺後半年の間、公の場で黙して語らなかったベラーの最初の公開講演であった。「アメリカは冬である」というきわめて格調の高い言葉で始まるこの講演は、アメリカの現実の宗教的意味の解明を意図しているが、個人的な苦悩とアメリカ人共有の苦悩の深みから問題をとりあげているので、深い感動にうたれないで読了することは難しい。

『破られた契約』の目的は「アメリカの現実についての省察」と同じように、アメリカの自己理解、文化の意味の解明にある。ベラーはアメリカの中心的な問題は道徳的・宗教的であると確信しているが、その後には、アメリカ史の特殊性と一つの社会学的一般理論がある。それは、いかなる統合的・ダイナミックな社会にも、人間及び社会行為の領域において、善悪・正邪についての共通の理解があり、その根底にはそのような理解に意味をもたせる共有の宗教的神話がある。そのような道徳的・宗教的理解は社会の正当性の根拠であると同時に、その社会批判の基

本的軌範になる。アメリカの宗教的構造・神話の核は、キリスト教的伝統の神の摂理のもとにある神聖な秩序であり、その秩序における道徳的規範は、自由・公正・愛であり、市民道徳として社会の基礎であった。

しかるに今日の状況は、端的に言ってこの市民道徳の概念が侵食されて空洞化されつつあるとベラーは指摘している。具体的には一切の義務がシニカルに受けとられ、犯罪の非道徳性について無感覚になりつつある。しかし、このような道徳的義務感の低下という傾向と同時に、分配の公正についての意識は強められ実現されつつあるという一つのパラドックスがあった。例えば、18世紀の奴隷制度、19世紀の移民・少数民族に対する暴力、20世紀の初めの女性の差別に対して今日のアメリカは相対的であるが、はるかに公正になっている。このパラドックスを理解する鍵は、個人の自由という18世紀の道徳的規範の影響である。17・18世紀の個人の自由は、道徳的・宗教的価値の全体の枠組みの一部であり、善を為す自由を意味し、市民道徳と殆んど同一化されていたが、18世紀の後半から次第に姿を現わし、19・20世紀に支配的になった功利主義は、この自由を公益ではなく、私利を追求する自由に変化させた。バビロンたるヨーロッパに対して新しいエルサレムであったアメリカが、今日バビロンと呼ばれる所以はここにある。

功利主義と結びついて現代アメリカの文化的複合を構成しているのは資本主義と科学であるが、この文化的形式にはそれ自体の現世的宗教とユートピア的理想がある。それは自己の利益を追求する自由を目的とした社会と文化の実現の為の技術的制御の神話である。

20世紀のアメリカはこのような文化形式がもたらしている問題——資本主義・功利主義支配のとまることのない展開と真理にいたる唯一の道は科学であるという信条の帰結としての社会の崩潰——に直面している。通常のアメリカ批判は合理的、技術的、功利的イデオロギーの受容と個別の制度的調整に集中しているが、これはアメリカの歴史の特殊性——その歴史の初めから政治的共同体であると同時に、超越の権威と力を意

識し、共通の価値に基礎づけられた精神的共同体であった——とその悲劇の深刻さを全く無視している。ここで最も根本的なことは人間観である。いかなるイメージが人間の魂をとらえているか、いかなる道徳的感受性、道徳的想像力が科学と技術に対して一つの展望を与えるか、ここに解決の基本的な緒をベラーは見出している。アメリカが自己破壊の危険性から脱却し、可能性に生きる知恵を身につける第一歩は、自己同一性の理解から生れる謙遜である。ベラーのこの著作における意図は、その謙遜への第一歩に寄与することである。

以上述べたような問題意識に基づいて、六つの問題がとりあげられている。第一の問題は「アメリカの起源についての神話」である。その神話は端的にいったアメリカの宗教的自己理解である。初めにあった、そして依然として生きているアメリカの宗教的自己理解はどのように捉えられるだろうか。その答としては具体的には1776年7月4日の独立宣言、さらに新憲法の設定にいたる一連の意識的決定に見いだされるが、その背景と根底を検討するならばこれらの一連の決定と行為は神話的振舞であることが明らかになる。では、その根底にあった神話は何であるかという、J・ウィンスロップ、J・コットン、J・エドワーズによって代表されるニューイングランドの指導者の行動原理となった聖書のメッセージであり、このメッセージは植民地時代の生活を通して浸透し、共和国創設の為の一連の出来事の宗教的構造となった。聖書外の主要な象徴はローマの自由の伝統——必要とあらば共和国の目的に奉仕する用意のある質実剛健な独立の農民からなる国家を理想とする——であるが、これもプロテスタントのエートスとある面では一つになる。歴史的検討の結果、明らかにされてきたことはアメリカ社会はその構成員の回心、或いは共和政体を支える市民道徳に基礎づけられた深い内的献身によって支えられていることであるが、その意味では神話は決定的な役割を果たしてきたことになる。この神話の理解は、アメリカ史における回心と契約、革命と憲法、解放と自由の緊張関係とその必然性を明らかにしている。

第二にとりあげられた問題は「選ばれた民としてのアメリカ」である。これはアメリカ史に一貫して流れている基調——契約と審判——の問題であり、第一の問題と密接に結びついている。アメリカの信仰復興運動のテーマは回心・契約・審判であり、選ばれた民の意味を鮮明・拡大・深化したが、同時にアメリカの国民意識の形成に大きな貢献をしてきた。このような国民的運動の延長線上に、国民という広範囲のレベルでニューイングランドのW・L・ガリソンやオハイオのW・ヴェルトの奴隷制廃止運動は展開したのである。このような背景の理解なしには、南北戦争の意義、A・リンカーンの第二回就任演説に見いだされる契約と審判についての偉大な解釈、リンカーンのアメリカ史における精神的位置が不可解であり、的はずれになる。アメリカ史に執拗に見られる社会変化、社会改革運動の背後にはアメリカの神話が生きているのである。

第三の問題としてとりあげられているのは、「アメリカにおける救と成功」である。回心・契約・審判と結びついた救のメッセージが、アメリカの国民意識形成に非常に大きな役割を果たしてきたことはすでに述べられているが、次第にW・ブレイクのいう単視眼的ビジョンが主役として表われ、その結果、人間経験において世界の実用的領域外のことが無視され、19世紀末には人生の意味として成功という概念が焦点になった。20世紀の初めには、一般民衆にとって、成功はJ・C・ヴァンダークが指摘しているように財産を意味していた。プロテスタントの伝統も例外ではなく、歴史的にはウィンスロップ、メーザー、エドワーズに代表されるように宗教と世界、神と富との間の緊張関係を深く意識してきたにもかかわらず、世俗的な成功は道徳的価値と宗教的救のたしかな徴であるという理解が一般的となった。この過程で抑圧と排除は個人・社会・国家のレベルで激化し、ベラーによるとアメリカは以前のどんな社会にも見られなかったような冷酷な貧欲と飽くなき物質的蓄積を公的に偶像化する社会となり、社会的混乱や心情的とげとげしさ、また富への競争から最も効果的に排除された人達の間で頻発する巷の犯罪に衝撃を

受けている。家庭・学校・教会などを含めてすべての制度を侵害してきた富と権力への無制限な競争は、政治的制度の構造を脅かしているのである。

第四にとりあげられている問題は、アメリカの共同体における包含——排除の問題である。アメリカほど苛酷で残忍な排除と人間の普遍的概念が並存しているところは他にないとベラーは指摘しているが、アメリカの今日の直面している第三の試練の主要な一つの面は、抑圧されてきた少数民族のアメリカにおける地位改善の為の闘争である。アメリカのプロテスタント社会においては排除は二重に作用している。第一に、ある集団の成員は一人前の個人としての資質に欠けているという主張であり、第二に、その主張に基づいて、その成員が一人前の市民になる手段を組織的に剝奪してきた。このような排除の二重と、善悪の区別が結びついた時、悪と見なされる集団に対してとられるあらゆる行為が正当化されて、そこに歯止めがなくなる。アメリカの価値の根本的再構築を求める場合、たしかにいかなる人間も社会も、同一性の感覚や他者との関係で自らを規定する境界をもたなければならないが、その差異の感覚がニグロに対する悪の投影や暴力的攻撃に転化する必要はない。アメリカはすべての成員を包含し、他の社会に開かれた社会を創りださなければならないが、その過程で文化的多様性の問題に直面することになる。この問題の解決にアメリカの生存、世界の生存はかかっているとベラーは主張している。

第五にとりあげられた問題は、アメリカのタブーとしての社会主義である。19世紀の初めに産業社会に対する批判としてヨーロッパに生まれた社会主義がアメリカでタブー視されてきたのは、資本主義的経済システムが神聖であり、絶対不可侵であるからではなく、アメリカの個人主義の伝統によるのである。今日のアメリカを支配している資本主義とアメリカの基本的価値は異質のものであり、一般に予測された以上に両者はきびしい対立と緊張関係にある。今日のアメリカの政治経済の傾向は、

アメリカの文化と共同体の基盤を破壊しつつあり、このままでは一切の努力が空しくなるという危機感をベラーはもっている。

最後にとりあげられているのは、「新しいアメリカの神話の誕生」である。悲劇的なことであるが、アメリカの破られた契約に対する審判が、驚いたことにアメリカの成功である。商業的文化の支配と成功のただなかに、自然環境・人間の連帯性・人格の破壊も進行している。かかる状況を克服する為には一つの新しい神話が必要であり、その神話と包括的理性を結びつけ、一体にする新しい想像的ビジョンが必要である。そこから、アメリカの必要としている新しい人間誕生と謙遜が生れるであろう。この新しい人間は、全く夢ではない。アメリカのかつてのどの世代も、これほど深刻に遂行倫理と自律的・技術的理性に疑問をいだき、これほどはげしく貧しき者、抑圧された者の十全な受容を要求しなかった。今日の世代の多くの者は、過去に比較して、人間的であることが何を意味するかについての一層深い感覚を具えている。

あまりにも楽観主義オプティミズムの形式で終るこのあまりにも簡略な文献紹介が、ベラーの悲観主義ペシミズムを否定しないように希望する。楽観主義的悲観主義、(Optimistic pessimism) がベラーの思想の現在の基調である。ベラーが『破られた契約』で提起した問題は、アメリカでは真剣に受けとめられているようである。アメリカの各地の主要大学の建国200年にちなんでの特別講演及びセミナーの講演者として招かれ、最近はひんぱんに大陸を横断しているとのことである。さらに注目すべきことはアメリカの伝統的な教会、教派が、ベラーを講演者として招いていることである。バプテスト教会の1000人を越える牧会者の特別集会はそのひとつの例である。教会のメンバーではなく、教会の外にあって教会に批判的であったベラーの教会における問題提起は、歴史的にプロテスタントの伝統と市民道徳・市民宗教が密接不可分であったことが意識されている徴候ではなからうか。このことは同時に、ベラーが問題として提起してきた市民宗教の実体が次第に理解されてきていることを意味している。特に『破られ

た契約』では、それが史的展開のなかで明らかにされているので、今後ベラーの市民宗教を問題にする場合、この書は決定的資料になることはいうまでもない。いくつかの流布している基本的誤解は訂正をせまられることであろう。

この書は、ベラーとアメリカ理解のみならず、自己理解、人間の宗教性理解の貴重な資料として注目されることになろう。